

高校生のラッパーがいろんなユニットとわちやわちやする話

トゥーループするトオル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生のラッパーでビートメイカーで女装癖があつて頭が良くてバカのイカレポンチ主人公が、いろんなユニットと絡むお話。

主にビビバスと絡ませていきたい。

多分ギャグ

作者はにわかですので設定のガバや解釈違いな点が多々見られると思います。ご注意ください。

アンチヘイトBLGLは保険です

目次

プロロロロログ	1
ビビバスと高校生ラツパーがわちやわちやする話	其の一 6
ビビバスと高校生ラツパーがわちやわちやする話	其の二 10
ビビバスと高校生ラツパーがわちやわちやする話	其の三 13
高校生ラツパーと暁山瑞希	20

プロロロロログ

東京都のチヨダに位置する日本武道館、キャパシティおおよそ15000人の観客席は満席で、熱気が立ち込めている。

季節は12月だというのにこの場所は寒さを知らない。むしろ暑苦しさを感じるほどだ。

この状況を作り出した張本人は一人、ステージ上でマイクを握った少年だった。彼の風貌は青のパーカーの下にオレンジのTシャツを着たレイヤード、サックスブルーのデニムパンツを履いており、ビニーを眉が隠れる程に深く被ってその上にサングラスを乗せている。サイズは全体的にオーバーサイズで所謂BーBOYファッションというものだ。

会場中にビートが鳴り響く。

少年は握ったマイクに込める力を強め、大きく口を開き、息を吸い込む。

『お前らコイツでラストのラストだ！終わりまで全力で手と声上げられるやつとんだだけいる？……全員行けるよなア!』

会場が割れてしまいそうなほどの歓声が沸き立つ。

少年は伝説となった。



◆
【T a i m】
年齢16にして武道館でワンマンライブを成功させたラッパ

神童と呼ばれた彼はこの武道館公演を最後に無期限の活動休止に入った。休止の理由は詳しく明かされていないが彼曰く、「絶対いつか戻ってくつからSNSのフォローだけは外すんじゃねえぞ！」とのことだ。

そして現在、彼が活動休止期間に入ってから半年以上が経過している。

半年以上たった今でもファンからの活動再開を望む声は後をたた

ないという。

一夜にして伝説を打ち立てたT a a i m

そんな彼は今――



ピシャァン！という何かが破裂したかのような音は、神山高校2―A組のスライド式ドアから発せられたものだ。

勢い良くドアを開いた少年が教室に飛び込んできたかと思えば、彼の親友である天馬司の元へと駆け寄る。

「おはよう司！」

「おお！おはよう時宗！ん？おいお前、手に持つてるその明らかにヤバそうな液体はなんだ？」

挨拶を交わす少年もとい時宗と司、その際司が時宗の手に握られたフラスコを指さしながら尋ねる。フラスコに内容された液体は、ドロドロとした質感の緑が渦巻いていて、明らかに人間が飲んではいけない見た目をしている。

「色々混ぜたら出来た！てことで飲め！」

全くと言っていいほどに脈絡が感じられない命令が司に下る。

当然、司はその命令を拒否した。

「断る！なぜ俺がそんな得体のしれないものを飲まねばならんのだ！」

ごもつともである。司は見えてくれからして劇薬の液体を飲まされるほどの義理を時宗に作った憶えはない。

「うるせえ飲め！」

しかし、理不尽極まりない押し付けが司を襲う。

「おいやめろー！ちよっ……」

時宗は司の腕をつかむと、無理矢理フラスコを司の口に突っ込んだ。

「んぐ……んぐ……!!! おッヅェ!! まっず！なんだコレ！おッ
えええ……」

床に膝と手のひらを付きゲホゲホと咳き込む司、それを見た時宗は悪魔のような笑みを浮かべる。

「あと3本」

あと3本、司からしてみればそれは、死刑宣告のようなものだろう。

「はっ」

今日という一日は始まったばかりだ。



その日の放課後、時宗宅にて、定期考査に向けての勉強会と称して彼らは集まっていた。

「なるほど、それで司君は今日一日中七色に発光してたんだね？」

紫をベースに、ところどころ水色のメッシュが入った髪色をした背の高い少年、神代類が今日司の身に起こったことを尋ねる

「ああそうだ、今日は時宗のせいで散々な一日だったよ。全く」
「ダハハ！ごめんで司、でも今日の司は一段と輝いて見えたぞ！」
「物理的になー！はっ倒すぞお前エ！」

まるで漫才のような会話を繰り広げる時宗と司、この様子を見ると、司は普段から時宗に振り回されているのだろう。

「えく、そんなに面白いことがあったのなら僕も学校行っておけばよかったよ」

残念そうに口を尖らせる可愛らしい服装をした少女、もしくは少年か、性別不詳でこの中では唯一の一年生、暁山瑞希。

「ほんとだよ、瑞希にも見せたかったんだけどなあ、ゲーミング司」
「アハハハ！ゲーミング司って！確かにそうだけど」

少年は目まぐるしく変わる七色の司を、ゲーミング司と名付けた。独特な感性をお持ちのようだ。

「おい暁山あー笑うな！」
「く……フツ……ごめん司君……流石に……フフツ……面白い……」

普段はミスティアスでどこか落ち着いた雰囲気醸し出している類すらも笑い始める。

「なア!?類まで！皆して俺を笑うんじゃない！」

司のその叫びが皆の耳に届くことは無く、このあと数分間は皆してゲーミング司のことで笑い合っていたらしい。



「っはー、笑った笑った」

「腹がいてえ」

「同意見だよ……フフツ」

「類はいつまで笑っているんだ」

ビビバスと高校生ラッパーがわちやわちやする話 其の一

おつすオラ時宗！超絶チルいラッパー（笑）だゾ！

ある日の放課後、特にすることの予定もなく暇を持って余っていた俺だが、突然無性に珈琲が飲みたくなった都合良いですね。

そんなわけでやってきたのがここ。ビビットストリートの一角にそびえるカフェバー、WEEKEND GARAGEだ。

しっかし、久しぶりに来たな。俺が活動休止して以来一度も来てないんじゃないか？

杏ちゃん元気にしてっかなー？

「邪魔すんでー……うおつ」

扉を開くと金属製ドアベル特有のカランカラン、という音が耳に響いた。と思ったのだが、パフォーマンスの練習でもしているのだろうか、心地よい鐘の音は電子的な爆音に掻き消され、代わりに聞き覚えのあるキレイな歌声が俺の鼓膜を刺激する。

ああ、杏ちゃんか、練習してるの。いい声してるわマジで。俺が男なら惚れてるね。俺男だけど。

店内に入り、店の景色全体が視界に広がる。すると、先程は声だけしか聞こえなかったパフォーマンスの全貌が見えてくる。どうやら、練習しているのは彼女一人だけではなかったようで、ステージの上には4人の少年少女が居た。

「あれ？冬弥と彰人じゃね？」

なんと、杏ちゃんと一緒に練習しているうちの2人はどちらも高校の後輩だった。ちなみにあともうひとりとは全然知らない女の子

ふむ、珍しい。冬弥はともかくパンケーキ※東雲彰人と杏ちゃんが一緒に練習しているなんて。

そして彼ら、どうやら歌うことに集中しすぎて俺の存在に全く気づいていないっぽい。

これはシャッターチャンス。そう思い、ポケットの中からスマホを取り出し、カメラを開く。

動き回って歌う彼ら全員を上手いこと画角に収める。これ地味に難しい。

はい、パシヤリとな。

うむ、いい画が撮れた。杏ちゃん、冬弥、人参※東雲彰人、知らない女の子がブレることなく綺麗に写っている。

練習の邪魔にならないよう、音を立てずに席に座る。

歌声を聴くために耳を澄ませる。……聴いてると分かるが、てか聴かなきゃ分かんのが当たり前だが、皆歌がうまい、これは疑うまい事実だ。

「いやしよーもな」

渾身のセルフツッコミ、しかし現実は無情なり。皆の歌声にかき消された。

そもそもこれ聞いているの誰もいないんだけど。悲しいなあ。

あ、曲終わった。あ、こつち気付いた。

「時宗さん!?!いつからいたんですか?」

「杏ちゃんのソロパート辺りからかな」

彼女の名前は白石杏、通称杏ちゃんだ。

杏ちゃんの父の兼さんには大分お世話になっていて、俺がまだ無名だった頃もよくライブのブッキングをしてくれていた。感謝してもしきれないほどの恩人だ。

杏ちゃんとはその時からの知り合いで、昔はよく一緒に歌ったりしていた。

「ええーそれって結構最初の方からじゃないですか!?!もー、いるならいるって言ってくださいよー」

「いやー、練習邪魔するのは悪いでしょ。にしても、杏ちゃんやっぱ歌上手いね。ホント綺麗な歌声、俺が男なら惚れてたよ。男だけど」

「あの、杏ちゃん、この人は一体……?」

先程杏ちゃん達と一緒に歌っていた知らない女の子が少し困惑した様子で尋ねる。

ちなみにボケをフル無視されたのは結構心に来た。

「ああそっか、こはねは時宗さんと会うの初めてだよ。紹介するよ、この人は五十嵐時宗さん。私達の一個上の先輩で、今は活動休止中だけど、ラッパーをやってる人なんだ」

「うん紹介ありがとね、杏ちゃ——」「それでね!」杏ちゃん?」

あれ?杏ちゃん?

「あのRAD WEEKENDにも出てたんだよ!しかもその時の時宗さんまだ中学生で出演者の中では最年少だったの!その時私も会場に居ただけど、もうほんっつとにカッコよくてね!?時宗さんが歌い始めた瞬間観客の皆圧倒されちゃって、さっきまで熱量はどこいったんだ!、つてくらい聞き入っちゃたんだよね!しかもしかも、曲が凄いだけじゃなくてMCもすごく上手なの!なんていうんだろ?盛り上げ上手ってやつかな?お客さんを巻き込んだステージングがとっても凄いくて、特に曲の歌詞を使ったC&Rが上手で、つい声を出したくなっちゃうようなコールをしてくるの!これってかなり難しいことで、見るだけなら簡単そうに思えるんだけど、実際にやってみると全然うまくいかないの。だから、時宗さんは本当に凄いなだよ!でもやっぱり、時宗さんの一番の魅力はそこじゃなくて……」

変なスイッチ入っちゃったよ?

「あ、杏ちゃん……?」

「おーけー杏ちゃん、もう十分だ。この子も困っちゃってるからそれぐらいにおこう」

「あ……と、とにかく!その、時宗さんは私の憧れで、目標の1人なの!」

正気に戻った(?)杏ちゃんが気恥ずかしそう言う。

そんな堂々と憧れだの目標だの言われるとなんだかむず痒い感じがするな。だが悪い気はしない。

「杏のやつ、また発作おこしてるじゃねえか、少しくらいは抑える努力

をしろよ。はあ……」

「諦めるんだ彰人、白石のあれはもうどうにも出来ない」

ビビバスと高校生ラッパーがわちやわちやする話 其の二

杏ちゃんが落ち着いたので、今一度自己紹介をしておこう

「改めまして、俺は五十嵐時宗ついてーます。よろしくね」

「あ、小豆沢こはねです！よろしくおねがいます！」

「こはねちゃんね、おっけー覚えて」

小豆沢こはねちゃん、この子は歌が上手い。いやこのクルーはみんな歌上手かったけど、この子はなんとというか、あまり今のヒップホップシーンでは見えないような歌声をしてんだよなあ。あ、勿論いい意味だぜ。すごい透き通っててキレイな声。杏ちゃんとかとはまたちと違うタイプ、弾き語りとかしたらめちやくちや映えそう。

「あの、五十嵐さんと杏ちゃんは一体どんな関係なんでしょうか？」

「五十嵐さんは硬いな、普通に名前と呼んでいいよ」

「は、はい！分かりました、五十嵐さん……あつ」

分かっているのかそれは……？いやでも俺もよくやるなこういうこと。言ったそばから間違えるやつ。

「ゆっくりでいいよ。こういうのは人それぞれだからね。で、杏ちゃんと俺の関係の話だね。……フツ、フハハハ！いいだろう！弱冠16歳にして武道館に立ったこの俺が！直々に教えて進ぜようじゃないかー！」

「あ、ありがとうございます……？」

「あー、気にすんな、こはね。この人情緒がイカれてんだよ。これが平常運転だ。」

「今の五十嵐先輩、司先輩みたいだった」

「武道館！そーいえば最近武道館公演のDVDが届いたんですけど

やっぱりすごいカッコよかったです！勿論現地には居たんですけど現地でしか味わえない臨場感とDVDでの綺麗な音で二度美味しいというかなんというかもーとにかく最高でした！」

「彰人は後で絞めるとして、杏ちゃん少し落ち着こう」

あと冬弥は司大好きかよ

「ハア!?わけわかんねー」

「彰人、お前は今かなり失礼なことを言っていたぞ。自覚を持ったほうがいいんじゃないか?」

「うっ…」

うわー、一番心に来るやつだ。こういう悪意なきマジレスが一番辛いんだよな。わかるぞわかる。辛いよなあ彰人。もう抱きしめてあげたい！

「さあ彰人！俺の胸に思いっきり飛び込んでおいで！」

「は?」

「すまない彰人、お前が言っていたことは妥当かもしれない」

「冬弥!」

オヨヨヨ…冬弥まで彰人を擁護するのか?俺に味方はいないのか…

「時宗さんが抱きしめられるっていつてるのに何やってんの彰人!?早く行けよ!オラツオラツ!」

「ちよ!おいやめろ杏!蹴るな!」

「杏ちゃん!?お、落ち着いてー!」

「あらあら、強かだわねえ最近の若い子は」

すごいパワーだねえ全く、わたしやビックリして腰抜かしちゃった

よ。

「言ってる場合かあ!? アンタのせいであんなになってんだよ!」

「彰人、その呼び方はないだろう。五十嵐先輩は一応先輩なんだぞ」

「ありがとう冬弥。でもいま君一応って言ったよな?」

実は冬弥俺のこと嫌いだったりしない?

「つーか! こはねは杏と時宗さんの関係について知りたいんだろ!? さっさと話してくれよ!」

「あつ、言われればそうだったな。おーけおーけー、じゃあこはねちゃん、俺と杏ちゃんの関係について少し話そうか」

「あ、やつと……じゃなくて! おねがいます!」

あ、待たされてるとは思ってたんだ。申し訳ないな。



「と、まあこんな感じかな」

「へえ、つまり杏ちゃんと時宗さんは師弟関係みたいな感じなんです
ね」

「師弟関係、意識したことなかったけどそうかもね。よく色んなこと
教えてたし」

「時宗さんの弟子!? 私が!?! ……確かに色んなこと教えてもらったけど
恐縮だよ!」

「恐縮って、杏お前、そんな難しい言葉使えたんだな」

「バカにしてる? してるよね? 殴る」

「落ち着くんだ白石」

ビビバスと高校生ラッパーがわちやわちやする話 其の三

「そーいや、さっき歌ってたのはなんかのイベントの練習かなにか？」
「ああはい、明日この四人でSTAY GOLDに出るんすよ。その予行って感じっすね」

「ほへ、STAY GOLD出るのか。俺も昔一回出たことあるぞ。まあ結果は言うまでもなく俺の圧勝だったかなー！」

「そんなこと誰も聞いてませんよ、五十嵐先輩」

冬弥やっぱ俺のこと嫌いだよな？なんでそんなに一言一言の火力高いの？

「あー私現場でみましたそれ！まだ時宗さんの名前があまり売れて無かった頃ですよー！はい、珈琲どうぞ」

「ん、ありがとう。そーいや杏ちゃんも居たねあん時」

もう3年以上前のことなのによく覚えてるもんだなあ案外。

杏ちゃんが淹れてくれた珈琲を啜りながら回想する。

俺がラップを始めたのは俺がまだ中学入りたての時、悪い事して親の気を引きたかったお年頃だったんよなあ。

あ、珈琲うま。けどあつっ！

あの頃の俺は何故か悪い事H I P H O Pみたいな謎の等式を頭の中で組み立て、それを実行に移してしまうというとても頭の悪さとイカれた行動力を持ち合わせていた。今の俺からは考えられないだろう？H A H A H A！どちらも健在です

「ねえ杏ちゃん、時宗さんにさっきの練習見ってもらってたのなら、なにかアドバイスとかいただけたりしないかな？」

「確かに！いいこと言うじゃんこはねー！さすがは私の相棒だね」

「アドバイス？いいけど……うーん」

いや、特に無い。頭を捻らせ深く思考するが何も思い付かない。皆しっかり歌えてたし連携も取れてるんだよなあ。

あつでも、一つだけあるかも。

「うん、皆歌も上手いし特に言うことないんだけど、こはねちゃんに一つだけあるかな」

「え、わ、私……ですか？」

「うん、こはねちゃんって見た感じライブ経験まだ少ないでしょ？こはねちゃんみたいなの、グループで歌っててライブ慣れしてない人によくあるんだけど、パフォーマンス中に観客の歓声が五月蠅すぎて、一緒に歌ってる他の人の音が聴こえなくなっちゃって歌えなくなっちゃうことがあるんだ。ちなみに俺も客演がいる曲で何回かやってる。ほんとにコレだけ気を付けてくれって感じかな、これ以外は何も言うことないよ」

「な、なるほど……！」

「ま、いざとなったら杏ちゃん達がカバーしてくれると思うから大して気負う必要もないさ」

「そうそう、大丈夫だよこはね。いざというときは私がしっかりリードするから安心して歌ってね」

「ん？リードする？……いやわからん。でもこれはそういう感じか？」

「……リードする？お前、それどういう……」

「え、どうしたの、彰人？」

「いや、お前とこはねはそういうもんなのか。やっぱなんでもねえよ」
「……？」

彰人も違和感を感じているみたいだな。あつやべ頭痛が痛い訳…意味が重複しちまった。

「ま、明日になればわかるかな」

「？ どうかしましたか？五十嵐先輩」

「ああ冬弥……いや、なんもねーよ。ただちよつと考え事してただけだ」

「ならいいんですが……」

少し冷めてきて、猫舌の俺には適切な温度になった珈琲を啜る。うん、うまい。

「杏ちゃん、ありがとう。私、本番頑張って歌うから……！」

「うん、任せて！迷ったときは私の音を聴いてね」
「わかった！ふふっ。杏ちゃんが隣りにいてくれると、心強いな」
「あはは、いつも一緒に歌ってるじゃん」
「は？おい、ちよつと待てよ！尊すぎんだろ！何だこの二人！推すぞいいのか！推すわ!!!あああああああ！（限界化）」



本番当日、STAY GOLD会場にやってきた。

ふむ、人が多いな。これなら俺がいるということもバレないだろう。一応この辺では有名人だからな、俺。

「ねえ見てあれ。Taaimじゃない？」

「え、マジじゃん！俺サイン貰いに行こうかな」

「そもそもなんでこんなところに居るんだ？」

ここでタイマーストップ、RTA終了です。

いやふざけんな早すぎるだろ。即落ちニコマどころか一コマに収まるレベルだぞ。

……仕方ない、一旦出よう。それで、杏ちゃん達の出番になるまでに変装してまた戻ってこよう。



『お次はVibid BAD SQUAD！高校生4人で結成された期待の新星だ！』

MCのよく通る声が会場に響き渡る

あつぶね、間に合った。変装のために古着屋行ってたら普通に買い漁っちゃった。瑞希に合いそうなアイテムも色々あったからそれで余計に時間を食った。

だがしかし、間に合ったから結果オーライなのだよ！

『みんな、今日は来てくれてありがとう！Vivid BAD SQ
UADだよ！』

杏ちゃんの言葉に呼応するように歓声が湧き上がる

うおー、バイブス高めだねえ。会場めっちゃ湧くじゃん。これならいいパフォーマンスが出来るぞうだ。

『全員、声出す準備は出来てるだろうな!』

ビートが流れるのと共に皆が歌い出す。

♪———!!』

うん、出だしはいい感じだ。

『私達の歌、届いてるみたいだね!でも、まだまだここから!もつと盛り上げてくよ!』

杏ちゃん調子いいな。でもってすげえ楽しそう。彰人と冬弥もだ。ノリに乗ってる杏ちゃんを見て負けじと歌ってる感じ、凄くいい。こはねちゃんも……うん、いい感じだ。上手いこと気が抜けない程度にリラックスが出来ている。もうすぐ次のパートだ。上手く入れればいいんだが……

『♪———!!!』

……これは、こはねちゃんしくつたな。やーっぱ現場慣れしてないとかこういうこともあるよなあ。しーなししーなし。大事なはこのトラブルをどう対処するかだ。杏ちゃん達の腕の見せどころだけどもどうなるか。

♪———!!』

だー!杏ちゃんがカバーに回っちゃうかー!こうなると次のサビが歌えないんじゃないか!?

……マズイぞ、皆の音が合わなくなってきた。

♪———!!!』

曲の終わりが近づいてきている。これはもう挽回難しいか……??



結局、杏ちゃん達のパフォーマンスは歌がバラバラになったまま終わってしまった。もうすぐライブも終了する時間だ。

うーん、バックヤード入れっかな……??

「すみませーん、ちよつといいですか？」

「ん？おお！時宗くん！久し振りじゃないか！なんでこんなところに居るんだ？」

「ご無沙汰してます。オーナーさん。今日来たのはSTAY GOLDに友達が出ててそれを見に来た感じですよ。で、えーっと、今からその友達にちよつと用があるんですけどバックヤード入れてもらえたりとかって出来ますかね？」

「あー、それくらいなら——」

全然OKだ。オーナーさんはそう言葉を続けたが、俺の意識は全く別の方向を向いていた。

「ごめんなさい！やっぱいいですよ！また今度ここでライブしたいですよ！それじゃ！」

「え、ちよつと?!時宗くん!?!」

オーナーさんに言いたかったことを吐き捨て、ライブハウスの出口に向かって駆け出す。

今、こはねちゃんがライブハウスから出ていくのが見えた。1人だったことから推察するに、ミスをした自分を責め、居ても立っても居られなくなって抜け出てきたのだろう。

出口の扉を開いて外に出ると、やはりいた。こはねちゃんが扉の横にある自販機の側で俯き佇んでいた。……声かけるか

「よっ、ライブおつかれさま、こはねちゃん」

「あ、時宗さん……その、ごめんなさい、昨日せっかく教えてもらったのに、全然ダメで……」

「はは、別に謝る必要なんてないよ、あんなミス、昔の俺じゃあ日常茶飯事だったし」

「でも……」

ガシャンという音を立て、話の傍らで操作していた自販機からペットボトルに入った水が2本落ちてくる。

「まあまあ、んなことよりほれ」

キヤップの位置を軸に、スナップを効かせてペットボトルを一本、こはねちゃんに向かって軽く投げる。

「うん、ナイスキャッチ。いっぱい歌ったんだからしつかり水分とって喉壊さないようにしなくちゃ」

「ありがとうございます……」

こはねちゃんが水を飲み始めたのを確認し、俺もキャップを開けてペットボトルに口を付ける。

「ブッフオー！これ硬水じゃねえか！」

思わぬふううちに口に含んだ水を嘔き出し、咳き込んでしまう。まっつつず！

「と、時宗さん!?!大丈夫ですか!?!」

「ゲホゲホ……ああうん大丈夫。心配ありがとね。俺硬水飲めないんだ。こはねちゃんは硬水飲める?」

「あつはい！大丈夫です！」

「ならよかった……おゝえゝエゝ」

舌に硬水特有の苦味を残しながらも、咳き込むのをやめてこはねちゃんに向き直る。

「はあ、先輩風吹かせに来たのに、この様ですよ。ほんとにカツコつかないなあ俺。……でもさ、こんな俺でもゲケエ舞台に立ってラツパー出来てんだ、人間やろうと思えば案外何でも出来るもんなんだよね。だからさ、こはねちゃんも落ち込んでないで次にやることを考えようぜ」

「次にやること……」

こはねちゃんは深く考え込んでいるようだが、俺今思い付きで適当に喋ってんだよなあ。まあそれっぽいこと言えたしいいか！

「そそ、俺は口下手だから気の利いたこととか言ってやれないけどさ、少しは元気出たんじゃない?どうよ」

「はい、ありがとうございます。次にやること、見つかりました！私、杏ちゃんに謝りにいかなきゃ……！」

「うん、行ってらっしゃい」

「はいー行ってきますー！」

……俺の役目はここまでだ。こはねちゃんが再び会場に戻っていった事を確認し、ライブハウスに背を向け歩み始める。

「帰りに兼さんのところでも寄るかねえ」

鼻歌交じりの帰り道、ネオンカラーに染まった通りが何時もより輝いて見えるのは、おそろく気のせいだろう。

高校生ラッパーと暁山瑞希

俺と瑞希が出会ったのは本当に偶然だった。

その日の俺は女装をして都会を練り歩き、良さげなカフェに入った。古着屋を見たりコスメショップで大人買いをしたりと短い休日を満喫していた。

え？なに？何故女装をしているのかって？そもそもお前に女装が似合うわけねえだろって？

女装を始めた理由は単純明快で、もつと見てもらいたかったからだ。いやまてこの言い方だと語弊があるな。まるで変態じゃないか。言い方を変えよう。

……無理だ思い付かん。まあこのままでも間違っではないしいいか。

だがしかし、これは女装を始めた理由なだけであって今も続いているのには別の理由がある。

こちらの理由も単純明快、普通に楽しいからだ。あとカワイイものが好き。女装は、いつもと違う服を着て、いつもはしないメイクをして、ウィッグを被って、とかなーり面倒くさい工程を踏んで行く必要があるのだが、この面倒くささがいいんだ。男のときは必要のないことが、とてもやりがいがある。そしてその面倒くさい工程を終え、最強に可愛くなった俺を見るのが超楽しい、街に出て周りからの視線を集めるのもめちゃくちゃ楽しい。ナンパなんてされたときにはもうエクスタシーだ。

え？やっぱ変態じゃね？だって？黙れ!!! (109db)

そして俺が女装したところでそれが似合うのかってことだが、似合うに決まってるだろ！バカがよ！

中性的な顔立ち、平均以下の身長、控えめな肩幅、いくら鍛えても筋肉がつかない謎体質、この4つを兼ね備えている俺が女装して似合わないとかねーんだよ！

メイクだって超うまいしファッションの知識も職業柄腐るようにある。これで女装しないなんておかしいでしょうが！

閑話休題、話を戻そう。俺と瑞希が出会った日の話だ。

買い物を大量にし、両手が紙袋で埋まって来る時間帯、数字で表すと四時過ぎあたり。シブヤの駅にある多目的トイレの横で俺の友達、神代類を発見した。様子からして誰かを待っているようだったが、とても暇そうにしている。なので声を掛けた。

「よう類、何してんだ？」

「おや、時宗くん、こんなところで会うなんてきぐ……」

あつやべ、俺今女装してんだった。類が宇宙猫みたいになってる。

「……時宗くん、だよね？」

「おう、俺は時宗であつてんぞ。んで類、もう一回聞けどお前ここで何してたんだ？トイレ待ち？」

「時宗くんこそ、何をしていたんだい？……その格好で」

「貴様ア！質問を質問で返すなあ！俺は普通に買い物だ、女装は趣味」
「なるほど、ところで時宗くん、君のその乱高下する情緒はどうにかならないのかい？」

「無理だ諦メロン」

無理不可諦めろ。俺は素でこれなんだ。

「そうかい……」

「おいやめろ天を仰ぐな。そこまであからさまに諦められると傷付くぞ。……で、結局お前ここで何してんだ？」

「ああうん、実は今日、友達とここに来ていてね、今はその友達がお手洗いに行ってるからそれを待っているところさ」

「？ お前友達いたのか司達以外に」

「君はかなり失礼なことを言うよね、かなりの高頻度で」

「ダハハ！安心しろ！お前だけだ！」

そもそも失礼なことっていうか事実言ってるだけだし！類が奇想天外エキセントリックボーイなのが悪いんだし！

「類おまたせ……ってどちらさま？」

多目的トイレのスライドドアがガラリと音を立て開くと、そこから薄ピンク色の髪をした少女……少女？が出てきた。

「瑞希、丁度いいタイミングだ。紹介するよ、これは僕と同じ学年の妖

怪、五十嵐時宗くんだ」

「ご紹介に預かりました、五十嵐時宗です。よろしく」

ペコリと一礼し、ピンク色の子に握手を求める。

ピンク色の子はノリが良いようで、握手に応じてくれた。いや肌白過ぎだろこの子。羨ましいなあおい！

「よろしくね〜……っていやいやいや、ツッコミどころ多すぎでしょ！ 類いまこの人のことこれって言ったよね!? それに妖怪ってなに！ この人はこの人で何も言わないし見た目完全に女の子なのに声男の人、しかもイケボだし……もうわけわかんないよー！」

「時宗と呼んでくれ。んで類よ、このノリの良いカワイイ子は誰だ？もしかなくてもお前の友達だろうけど」

「うん、時宗くんにも紹介するよ、こちらは僕の後輩の暁山瑞希だ。仲良くしてあげてくれると嬉しいな」

暁山瑞希、どっかで聞いたこと……いやないな。初めて聞く名前だわ。でもって類の後輩か、あれ？てことは……

「神高の人？」

「あつ、うん、そだよー。ボクは暁山瑞希、よろしくね、時宗先輩」

「適応早いな暁山」

「まあボクの周り変人ばつだからねー。あ、それとボクのこととは瑞希って呼んでほしいな」

「わかった、よろしくな瑞希」

「うん、ふたりとも仲良く出来そうで何よりだよ」



これが俺と瑞希の出会いだ。あれから俺と瑞希は連絡先を交換し、カワイイ好き同士トントン拍子で仲良くなつていった。して、なぜこのような話をしたのかというとそれはズバリ、今日は瑞希と一緒に買い物に行く日だからだ！昨日は楽しみすぎて夜も眠れなかったぜ！そもそも誰かと出掛けてお買い物すること自体初めてなのだ、ちよう楽しみ！勿論女装もしているぞ！

……それはそうと

「かなり早くに着いてしまった……」

集合時間は11時、現在時刻は10時10分。集合までまだ50分間もある。どうしたものか。

まあ無難にカフェでも入って時間潰すかねえ……



ということで、視界に入りたい感じの雰囲気を纏ったカフェに入店、んーシヤレオツ、こういう空気感あんまり好きじゃないんだよねあ。じゃあなんで入ったんだよって話なんだが。

奇跡的に並んでいなかったレジに向かって注文をする。

「ホワイトモカのトール一つください、あ、エスプレッソショット追加でおねがいします」

ここに来るときはだいたいこのオーダーをする。特に拘りなどはない。かといっていつもと違うものを頼んで冒険したいかと言われるとそういうわけでもない。だからいつも同じものを頼んでいる。これは俺と同じ考えの人一定数いると思う。

注文したドリンクを受け取り、間際のカウンター席につく。

あくどっこいしょ。彼は17歳です

さて、何をして暇を潰そうか。

……新曲のリリックの続き書くかあ。

スマホのメモ、最終更新日が2週間程前のものを開く。

実はこの曲の歌詞制作、去年の後半から取り組んでいるのだが、未だに書き終わらない。所謂、スランプというやつだろう。ちなみに俺の活動休止の決め手になったのがこいつだ。書けないのに無理矢理書こうとしている曲が出来る訳が無い。ならばいつそのこと一度ラッパを止めてしまおうということで活動休止になった。

無論スランプは今も続いている。まったくどうしたものかと、ここ最近はずっと頭を悩ませているのだ。

今日は一回歌詞の構成見直すか……

「んー……H o o k ラップでいうサビのことを頭にも持ってきて……
あーそれだと尺が長すぎるか？……だめだ、やっぱ書けねえ」

しかめっ面でスマホとにらめっこするのをやめ、氷が溶け切り、味が薄まってきたホワイトモカの残りをすべて飲み干す。

現在時刻は10時50分、そろそろ出るかね。

席を立ち上がり、空の容器をゴミ箱に捨て、店を後にする。

しかし、全く書けなかつたな、リリック。今まで曲書いてきてこんなことは初めてだからどうすればいいのかもわからねえんだよなあ。

あー！わかんねー！どうすればいいんだー！

つといかんいかん落ち着け俺。ネガティブ思考は良くない。よくなくななくななくなかない？作者はスチ○ドラ聞きながら執筆作業をしています……ん？これだと良いことにならないか？ まあいいや。

こんな時には音楽を聞こう！気分転換には音楽だ！音楽最高！音楽最高！

いつも利用しているサービスのプレイリストを開く。

んー、今日は何聴こうかな。あ、そうだあのグループの曲聴こう。

えーと何だったっけ名前。おもいだせねえや

スマホの液晶を、慣れた手付きで連続でスワイプする。

確かこの辺に保存してたはずなんだが……つとあった。ああそうだ、ニーゴだニーゴ。

【25時、ナイトコードで】通称ニーゴ、俺とは作っている曲のジャンルが全く違うのだが、最近よく聴く。このグループの曲を聴くと心が軽くなるような気がするのだ。

あーでも、ニーゴの曲聴くならMV付きのほうがいいか。

そう思いニーゴが楽曲投稿に利用している動画配信サービスのアプリを開く。

1000を超える登録済チャンネルの海の中から、なんとか見つけ

出し、ニーゴのチャンネルに飛び、そのまま一番上に出てきた動画を再生する。

いい曲にいい歌詞、いいイラストにカワイイMV。グルーブならではの高クオリティだな。次のMVニーゴの人に頼もうかな。



ニーゴの曲を聴いて時間を潰し始めて約10分、3曲めが終わり次の曲を再生しようと思ったその時。

「おはよー時宗先輩、もしかして待った？」

瑞希が来た。時刻は11時、瑞希は集合時間ピッタリに来るタイプようだ。

「おはよう瑞希、全然待ってないから安心しろ。今来たところだ」

思いつ切り嘘だけだな！

「ならよかった、じゃ、早速行こっか！」

「そうだな、瑞希はなんか買いたいものとかあんの？」

「うん、行きたいショップがいくつかあるんだよねー」

「なら、瑞希の行きたいところからまず回っていくか」